失われた“匂い”を求めて

――言語拡張空間としてのメタバース

伊藤雄馬
（言語学者）

言語とメタバース。この一見相容れないように見える２つの概念に共通点があるとしたら、どんなものだろうか。タイ・ラオスの狩猟採集民ムラブリの言語を研究する伊藤雄馬は、「嗅覚」を切り口に、仮想世界と言語世界を結びつける。異端の言語学者が切り開く、まったく新しいメタバース論。

池袋で碇シンジになった。最強の拒絶タイプ、第一〇の使徒と相まみえたぼくは、見事に撃沈し、L.C.L.が血に染まった……。

『新世紀エヴァンゲリオン』を知らない方には、なんのことだかわからない話で申し訳ない。これは、池袋のVRゲーム専門店での話だ。二〇一九年、往年のエヴァファンであるぼくは、VRで初号機に乗れる！　というだけで、当時住んでいた富山からわざわざ東京に出向いた。主人公のエヴァ初号機パイロット・碇シンジ君になるためだ。

汎用ヒト型決戦兵器であるエヴァンゲリオンのコックピットは、L.C.L.という液体で満たされている。この液体が肺に入り、呼吸の代わりに酸素を供給するなどの役割を果たす。VRのゲーム内でも、エントリープラグにL.C.L.が注入される場面があり、また戦闘中にダメージを受けると「ゴボゴボッ」という音とともに目の前に泡が現れて、L.C.L.の中にいる感覚を演出してくれている。しかし、それは演出に留まっていた。ぼくはそこに不満を感じてしまった。〝匂い〟が足りなかったのだ。

L.C.L.は劇中の描写から、「原始の海」「生命のスープ」などと呼ばれ、子宮内の羊水を連想させる。エヴァに乗るようになって間もない頃のシンジ君はL.C.L.を「血の匂い」と複雑な表情でひとりごつ。ヒロイン格の綾波レイは、シンジ君の乗っていた初号機のL.C.L.から「碇くんの匂いがする」と言うし、新劇場版のヒロイン格である真希波・マリ・イラストリアスは、空中から颯爽とパラシュートで登場してシンジに覆いかぶさり、「君、いい匂い、L.C.L.の香りがする」と言う。このような描写から、エヴァファンならば、必ずこういう疑問を抱くはずだ。「L.C.L.って結局どんな匂いやねん」と。

しかし、その疑問への答えはVRにはなかった。当たり前だ。VRにはまだ嗅覚を伝える機能はない。目の前に広がる世界は紛れもなくエヴァで、視覚、聴覚、触覚はその世界に没入した。けれど、ふとしたときに醒めてしまう。その最たる理由は、〝匂い〟の不在だ。

メタバースは言語拡張空間

この例に顕著なように、技術革新はめざましいものの、メタバースはいまだ五感をすべて再現するには至っていない。ぼくがVR内で経験したように、それは視覚、聴覚、触覚の世界であり、嗅覚と味覚を欠いている。この欠如は、ぼくに言語を連想させる。人の言語もまた、視覚、聴覚、触覚を主に用い、嗅覚と味覚が欠如しているからだ。

話し言葉は聴覚を用いる。書き言葉は視覚。手話も視覚。点字は触覚を用いる。このように、言語コミュニケーションは聴覚、視覚、触覚を用いたコミュニケーションだと言える。言い換えると、嗅覚と味覚は用いていない。

もっとも、言語によらないコミュニケーションでは、人は嗅覚も味覚もおおいに用いてコミュニケーションを図っている。嗅覚については、匂いが印象に深く関わっていることは、経験的にも科学的にも知られていることだ。デートの前にシャワーを浴びるのは、清潔にするだけでなく、匂いを気にかけているからだ。その後に香水をつけるのも、それが自分の印象を左右することを知っているからだ。

味覚も、料理などの間接的なものに限らず、身体接触のような直接的なコミュニケーションの面で無視できない。宇多田ヒカルは『First Love』の冒頭で、「最後のキスは／タバコのflavorがした／ニガくてせつない香り」と表現している。“flavor”は嗅覚と味覚の両方を含む語であり、「香り」というから嗅覚的な表現だとも受け取れるが、キスが唾液のコミュニケーションである以上、そのニガさは嗅覚だけでなく、舌に伝わる味覚としての“flavor”として表現されていると考えるのが自然だろう。

このように、嗅覚も味覚も日常的なコミュニケーションでは欠かせないものだ。性愛を含めたプリミティブなコミュニケーションにおいては、とくに。「テクノロジーは軍事と性欲によって進展する」とよく言われるが、VR技術も性欲によって促進されている側面があるはずだ。VRでエヴァに乗るためにぼくは東京まで出なければならなかったが、VRでAVを観るなら、富山の近所のネットカフェでも可能だった。それほどVR技術のAVへの応用は早く、すぐに普及した。しかし、それにもかかわらず、嗅覚や味覚の実装は思いのほか進んでいない。嗅覚や味覚の電子的な表現が難しい、という理由もあるだろうが、ぼくにはそれだけが理由だとは思えない。

匂いの言語学

事実として、嗅覚は、他の感覚に比べて研究が遅れている。視覚であれば、色の波長で分類されるし、聴覚も音波の波長で区別される。しかし、匂いには分類のための指標が確立されて

VRアクティビティ「エヴァンゲリオンVR」のプレイ画像　©カラー　©BANDAI NAMCO Amusement Inc.

この続きは本誌でどうぞ！